

## シネヘン・ブリヤート語のclitic

山越康裕

(日本学術振興会特別研究員, 北海道大学)

### Clitics in Shinekhen Buryat

YAMAKOSHI, Yasuhiro

JSPS Research Fellow

Hokkaido University

Shinekhen Buryat, a Mongolic language spoken in Inner Mongolia, is one of the 'prototypical' agglutinative languages. A free form often takes bound forms like (en)clitics or suffixes. But the distinction between clitics and suffixes are not so clear.

It is often said that clitics usually occur outside their hosts, and must be independent in sentences. In Shinekhen Buryat, like other Mongolic languages, a ROOT with derivational suffix(es) forms a STEM, and in sentences, stems occur with inflectional suffixes:

e.g. *id'-ee-l-ee.* (to eat-[V>N]-[N>V]-IPFVP) "S/He had a meal."

In other words, all declinable words occur with inflectional suffixes like [STEM-INFL]. If so, we may define clitics as 'bound forms which occur outside inflectional suffixes'.

In this paper, we see if this hypothesis is valid or not. In conclusion, I would like to say that the hypothesis is not sufficient to distinguish clitics because some suffixes do occur outside inflectional suffixes. Probably, the prosodic feature -- pitch accent pattern, which I suggested in Yamakoshi (2004), is the only clue to distinguish between clitics and suffixes in Shinekhen Buryat.

**Keywords:** clitic, bound form, suffix, Mongolic, Buryat

**キーワード:** クリティック, 付属形式, 接尾辞, モンゴル諸語, ブリヤート語

1. はじめに
2. シネヘン・ブリヤート語のclitic
3. 類型的パラメータによる検証
4. 「語」を完結させる要素の規定
5. まとめ

#### 1. はじめに

シネヘン・ブリヤート語<sup>1</sup>は中国内蒙古自治区北部に位置する呼倫貝爾市の錫尼河蘇木を中心に居住するブリヤートおよびハムニガン・エヴェンキの人々, 約 6,000 人によって使用されるモンゴル系の言語である。周辺のモンゴル系言語同様, 語の派生はもっぱらsuffixの接続によっておこなわれ, また文中の文法関係の標示もhostとなる形式に付属的要素が接続することであら

<sup>1</sup> 当該言語の音素目録は次のとおりである。母音 : a, o, ɔ, e, u, ø, i 子音 : (p), (pʰ), b, bʲ, t, tʰ, d, dʲ, (k), (kʰ[c]), (c[ts]), (cʰ[tʃ]), s, sʲ[sʃ], z, zʲ, x[x~χ], xʲ[ç], ɡ[ɣ~ɣʲ], ɡʲ[j], h, l, lʲ, r, rʲ, m, mʲ, n, nʲ[n], ŋ。

わされる。つまり、「語」は自立性の強いhostに自立性の低い付属要素がつぎつぎと後続する構造をとる。しかし付属要素の自立性は一律ではなく、付属語と付属形式との区別をどのように規定すべきかが重要となる。

筆者は山越 (2004) でシネヘン・ブリヤート語のclitic<sup>2</sup>が音韻的に規定できると主張した。本稿では、その他の側面、とくに「語」の形態的完結性という面からcliticとsuffixとの境界が規定できるのかどうか検証し、結果としてその規定が困難であることを述べる。その手順として、まず山越 (2004) の定義にしたがったcliticを列挙する。それらについてそれぞれがcliticの類型的パラメータをどの程度共有しているのか観察し、すべてのcliticが有する「形態的に完結しているhostに接続する」という点に着目したうえで、hostが完結するために必要とする要素は何であるのか、またその要素が規定でき、それよりも外に続く付属要素をcliticとして規定することが可能かどうか検討していく。

## 2. シネヘン・ブリヤート語におけるcliticの定義

これまでモンゴル諸語におけるcliticにかんする議論が見られなかったことをふまえ、山越 (2004) では音声・音韻、形態・統語におけるcliticの類型パラメータを用いて分析した。その結果としてシネヘン・ブリヤート語の自立語、clitic、suffixが(1)のように音韻面から分類できると主張した。

- (1) 自立語：単一のアクセントの山を持ち、直前の語のアクセント位置を移動させない。  
 clitic：独自のアクセントの山を持たず、'host'のアクセント位置を移動させない。  
 suffix：独自のアクセントの山を持たず、語のアクセント位置の移動を引き起こす。  
 (山越 2004: 175)

(1)の定義に沿った場合のシネヘン・ブリヤート語のcliticには、次のようなものがある。

- (2) シネヘン・ブリヤート語のclitic一覧  
 文末モダリティ：=jum, =daa<sub>4</sub><sup>3</sup>, =buddee, =s'etee  
 疑問：Yes-No疑問=go<sub>2</sub>, Wh疑問 =b, 問いかけ =ba (<Chi. 吧ba)  
 完了アスペクト：=han<sub>3</sub>, =le (<Chi. 了le)  
 条件節形成：=haa  
 人称：述語人称，所有人称 (表1参照)  
 とりたて：=le, =s'e, =s'je, =haa

表1. 述語人称および所有人称のclitic

	述語人称		所有人称	
	SG	PL	SG	PL
1	=bi, =b <sup>l</sup>	=bd <sup>l</sup> a <sub>2</sub>	=m(ni)	=mna <sub>2</sub>
2	=s'a <sub>2</sub> , =s <sup>l</sup>	=ta <sub>2</sub>	=s'(ni) / =(ni)(2SG:HON)	=tna <sub>2</sub>
3	なし		=in (単複の区別なし)	

これらはいずれも機能的意味を有するものであり、語彙的意味は持たないという、意味的に共通した特徴を持つことがわかる。ただし、機能的意味を持つものは自立語にも確認される (e.g. 強調の副詞mas<sup>j</sup>や重複形式など)。このことから、機能的意味を持つという特徴は、必要条件ではあるが十分条件ではない、つまり意味からは厳密に規定できないということになる。

<sup>2</sup> シネヘン・ブリヤート語にはprocliticおよびprefixは確認されない。以下ことわりのないかぎりclitic, suffixと表記するが、このcliticはすべてencliticをさすものとする。また、本稿におけるclitic, suffixは、ことわりのない限り(1)で示す山越(2004)による定義にそった形式をさすものとする。

<sup>3</sup> 以降、母音調和による交替形を有する形式については、末尾に下付きイタリックで交替形の数を示す。

## 3. 類型的パラメータによる検証

以降、(2) にあげたシネヘン・ブリヤート語の clitic が、(1) の「アクセント」以外の類型的特徴をどの程度有しているのかについて検証したい。

## 3.1. 母音調和

シネヘン・ブリヤート語をはじめ、モンゴル諸語には「母音調和」が存在する。一般に母音調和は「語内部の母音の共起制限」と解釈され、語の第一音節にあらわれる母音に以後の音節の母音が同化する。そのため、通常 suffix はその host に応じて母音が変わる。

(3) 出動名詞派生接尾辞  $-aa_4$  の母音交替の例

- |                   |                               |                   |
|-------------------|-------------------------------|-------------------|
| a. <b>dab-aa.</b> | b. <b>xoɾ<sup>i</sup>-oo.</b> | c. <b>med-ee.</b> |
| 越える-[V>N]         | 囲む-[V>N]                      | 知る-[V>N]          |
| 「峠」               | 「囲い」                          | 「知らせ」             |

suffix の交替形の数を決まっており、次の表 2 のパターンにまとめられる。

表2. 母音調和の交替パターン

交替形の数	パターン (カッコ内は任意)	例
4	(C)aa <sub>4</sub> (C) /aa ~ oo ~ ee ~ eo/	奪格 -ahaa <sub>4</sub> : -ahaa ~ -oooo ~ -eh ee ~ -ehoo
3	(C)a(i) <sub>3</sub> (C) /a ~ o ~ e/	完了 -han <sub>3</sub> : -han ~ -hon ~ -hen
2	(C)o(V) <sub>2</sub> (C) /o ~ u/	未来 -ooz <sub>2</sub> : -ooz <sup>a</sup> ~ uuz <sup>e</sup>

「語内部の共起制限」と解釈される以上、「語」の外に接続する clitic には母音調和の影響が及ばないと考えられる。実際に、多くの clitic は母音調和にかかわらず独自の母音を有する。

(4) とりたての=s<sup>i</sup>e

- |                               |                               |                               |                                 |
|-------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|---------------------------------|
| a. <b>xaa=s<sup>i</sup>e.</b> | b. <b>xen=s<sup>i</sup>e.</b> | c. <b>nom=s<sup>i</sup>e.</b> | d. <b>munoo=s<sup>i</sup>e.</b> |
| どこ=TPC                        | 誰=TPC                         | 本=TPC                         | 今=TPC                           |
| 「どこでも」                        | 「誰でも」                         | 「本も」                          | 「今でも」                           |

しかし、中には母音調和の適用を受け、母音に変化する clitic があることも見逃せない。次にあげるように、人称にかかわる clitic、完了 =han<sub>3</sub>、Yes-No 疑問 =go<sub>2</sub>、文末 =daa<sub>4</sub> は交替形を有することが確認される。

(5) 1 人称複数述語人称 =bd<sup>i</sup>a<sub>2</sub>

- |  |                                   |  |
|--|-----------------------------------|--|
| a. <b>jab-aa=bd<sup>i</sup>a.</b>        | b. <b>xel-ee=bd<sup>i</sup>e.</b> | c. <b>oo<sup>i</sup>-oo=bd<sup>i</sup>a.</b> |
| 行く-IPFVP=1PL                             | 言う-IPFVP=1PL                      | 着く-IPFVP=1PL                                 |
| 「おれたちは行った。」 「おれたちは言った。」 「おれたちは(そこに)行った。」 |                                   |  |

(6) 1 人称複数所有人称 =mnai<sub>2</sub>

- |                            |                      |
|----------------------------|----------------------|
| a. <b>jab-xa=mnai.</b>     | b. <b>xele=mnai.</b> |
| 行く-FUTP=1PL:POSS           | ことば=1PL:POSS         |
| 「おれたちはもう行くべきだ。」 「われわれのことば」 |                      |

(7) 完了 =han<sub>3</sub>

- |                                |                       |
|--------------------------------|-----------------------|
| a. <b>jab-aa=han.</b>          | b. <b>xel-ee=hen.</b> |
| 行く-IPFVP=PFV                   | 言う-IPFVP=PFV          |
| 「(彼らは)行ってしまった。」 「(彼らは以前に)言った。」 |                       |

(8) Yes-No疑問 =go<sub>2</sub>

- a. jab-aa=go.  
行く-IPFVP=Q  
「(彼らは) 出かけたのか?」
- b. xel-ee=gu.  
言う-IPFVP=Q  
「(彼らは) 言ったのか?」

(9) 文末モダリティ =daa<sub>4</sub>

- a. tiim bai-na=daa.  
そのような ある-PRS=MOD  
「そうなんだよ。」
- b. tiim=le=dee.  
そのような=TPC=MOD  
「そうだよ。」

ただし、これらには suffix とは異なる点が見受けられる。まず述語人称や所有人称は母音調和が「不完全」である。シネヘン・ブリヤート語の母音調和は表2のように a~ɔ~e(~ə)の系列による交替と o~u の系列による交替があり、a~ɔ~e(~ə)の交替の場合、交替形の数は3もしくは4が基本となっている。しかし述語人称、所有人称は円唇性の調和による交替形を欠いている。

さらに、ほとんどのsuffixが母音調和によって母音が交替するのに対し、cliticは母音が交替しない場合がある。たとえば1人称複数述語人称cliticはhostの母音にかかわらず=bd'eとなることが多い。(10)は(5)のcliticの母音が交替しない例である。

## (10) 1人称複数述語人称 =bd'e

- a. jab-aa=bd'e.  
行く-IPFVP=1PL  
「おれたちは行った。」
- b. xel-ee=bd'e.  
言う-IPFVP=1PL  
「おれたちは言った。」
- c. ɔs<sup>i</sup>-ɔɔ=bd'e.  
着く-IPFVP=1PL  
「おれたちは(そこに)行った。」

上記にあげた交替形を有するcliticのうち、Yes-No疑問cliticの=go<sub>2</sub>をのぞき、いずれも母音が交替しないことがある。交替する場合としない場合とのあいだには何らかの差異が存在する可能性があるが、現時点では不明である。

以上、交替のパターンが不完全であること、交替しない場合があることを考えると、suffixに比べcliticは全体的にやはり自立性が強い傾向はあるといえる。ただし山越(2004: 174)でも述べているとおり、母音調和は傾向としてclitic, suffixの境界を示しうる指標にすぎないとするのが妥当だろう。Yes-No疑問clitic=go<sub>2</sub>が母音調和の影響を受けている一方、suffixにも交替形を持たないものが存在するためである。たとえば否定 -guiや、予想される交替形があらわれないことがある奪格 -ahaa<sub>4</sub>などがこれに該当する。

## (11) 否定-gui

- a. ab-aa-gui.  
取る-IPFVP-NEG  
「取らなかった。」
- b. xel-ee-gui.  
言う-IPFVP-NEG  
「言わなかった。」
- c. ɔɾ-ɔɔ-gui.  
入る-IPFVP-NEG  
「入らなかった。」

(12) 奪格-ahaa<sub>4</sub>/-ahaa (上段が母音調和しない例/下段が母音調和した例)

- a. ab-ahaa.  
ab-ahaa.  
父-ABL  
「父から。」
- b. ger-ahaa.  
ger-chee.  
家-ABL  
「家から。」
- c. japɔɔn-ahaa.  
japɔɔn-ɔhɔɔ.  
日本-ABL  
「日本から。」
- d. bəən-ahaa.  
bəən-cheə.  
シャマン-ABL  
「シャマンから。」

## 3.2. 音節構造

cliticをあくまで「語」としてとらえるのであれば、その音節についても「語」としての構造を保っている必要がある。シネヘン・ブリヤート語の音節構造は(C)V(V)(C)と規定できる。しかし、1人称複数述語人称=bd'a<sub>2</sub>, 所有人称のうちの=mn<sub>1</sub>i(1SG:POSS), =mnai<sub>2</sub>(1PL:POSS), =s'ni

(2SG:POSS), =tni (2SG:HON:POSS), =tnai<sub>2</sub>(2PL:POSS) およびとりたて =s<sup>j</sup>je 「～さえも」は要素頭で子音が連続しており、「語」としては不適格な構造をなしている。

特徴として述語人称や所有人称のcliticに要素頭子音連続が多いといえる。これらはいずれも、通時的にはCVCVという音節構造をなしていたものであり、現在の形式はその第1音節母音が弱化、消失したものである (e.g. \*bide > =bd<sup>h</sup>a<sub>2</sub>(1PL), \*cinu > =s<sup>j</sup>ni(2SG:POSS))。とくにこの述語人称cliticは人称代名詞が文法化によって付属語になったと考えられており (Hopper and Traugott 1993: 140), 本来「語」としての音節構造を保っていたものが付属語化した結果、母音が消失したと推測される。

また、Wh疑問 =be, Yes-No疑問 =go<sub>2</sub>は子音のみであらわれることがある。こちらも語としての音節構造を有しているとはいえない。

- (13) a. a<sup>h</sup>an=in      hain=be.      b. ter      xaana      ɔs<sup>h</sup>-ɔɔ=b.  
       どれ=3:POSS よい=Q      それ      どこに      着く-IPFVP=Q  
       「どれがよいのか？」      「あいつはどこに行った？」
- (14) a. tede      bai-g-aa=go.      b. s<sup>h</sup>ii      bai-g-aa=g=s<sup>h</sup>a.  
       3PL:NOM いる-E-IPFVP=Q      2SG:NOM いる-E-IPFVP=Q=2SG  
       「あいつらはいたか？」      「お前はいたか？」

### 3.3. hostの形態的完結性

一般に affix は語内部、clitic は語外部に接続する付属的要素と考えられている。ということは、cliticの直前の要素はすくなくとも形態的には完結している形式になっていなければならない。たとえば (15) は、とりたてのcliticである =le が欠けても (15') のように非文とはならない

- (15) neg=**le**    odaa      nam-da    xele-gtii.  
       一=TPC 回      1SG-DAT 言う-2PL.IMP  
       「一度だけぼくに教えてください。」
- (15') neg      odaa      nam-da    xele-gtii.  
       一      回      1SG-DAT 言う-2PL.IMP  
       「一度ぼくに教えてください。」

述語人称および条件節を形成する =haa 以外のclitic は =le の場合同様に省略しても非文とはならない。(16)(16') は完了clitic, (17)(17') はWh疑問cliticの例である。

- (16) bii      tii-z<sup>e</sup>           xel-ee-gui=**hen**=bi.  
       1SG:NOM  そうする-CVB.IPFV 言う-IPFVP-NEG=PFV=1SG  
       「おれはそう言わなかった。」
- (16') bii      tii-z<sup>e</sup>           xel-ee-gui=bi.  
       1SG:NOM  そうする-CVB.IPFV 言う-IPFVP-NEG=1SG  
       「おれはそう言っていない。」
- (17) s<sup>h</sup>ii      xaagoor      jab-aad      ir-ee=**b**=s<sup>h</sup>e.  
       2SG:NOM  どこを    行く-CVB.PFV 来る-IPFVP=Q=2SG  
       「お前はどこに行ってきたのか？」
- (17') s<sup>h</sup>ii      xaagoor      jab-aad      ir-ee=s<sup>h</sup>.  
       2SG:NOM  どこを    行く-CVB.PFV 来る-IPFVP=2SG  
       「お前はどこに行ってきた？」

いずれも *clitic* の省略によって文意は変わるが、文構造自体は適格である。同様に所有人称も省略可能である。

- (18) *minii s'arpa-jii=nni abaas'-ii=s'.*  
 1SG.GEN マフラー-ACC=1SG.POSS 持っていく-2.IMP=2SG  
 「おれのマフラーを持っていけ。」

- (18') *minii s'arpa-jii abaas'-ii=s'.*  
 1SG.GEN マフラー-ACC 持っていく-2.IMP=2SG  
 「おれのマフラーを持っていけ。」

述語人称の *clitic* は所有人称に比べ照応関係を明確に示すため、一般には省略不可となる<sup>4</sup>。

- (19) *bii tii-z'e xel-ee-gui=b'.*  
 1SG.NOM そうする-CVB.IPFV 言う-IPFVP-NEG=1SG  
 「おれはそう言っていない。」

- (19') \* *bii tii-z'e xel-ee-gui.*  
 1SG.NOM そうする-CVB.IPFV 言う-IPFVP-NEG  
 「おれはそう言っていない。」

しかし (19') で述語人称の *host* となっている *xeleegui* は、形態的には適格であり、(19') の主語を 3 人称にかえた別の文中でごくふつうに用いられる構造である。

- (19'') *tii-z'e xel-ee-gui.*  
 そうする-CVB.IPFV 言う-IPFVP-NEG  
 「(あいつは) そう言っていない。」

条件節を形成する *=haa* も、述語人称とおなじく統語的には省略できない。しかし (20) の例中の *host* の *os'-oo* は形態的には適格である。

- (20) *tere os'-oo=haa bii os'-xo-gui=b'.*  
 3SG.NOM 着く-IPFVP=COND 1SG.NOM 着く-FUTP-NEG=1SG  
 「あいつが行ったならおれは(そこに)行かない。」

- (20') \* *tere os'-oo bii os'-xo-gui=b'.*  
 3SG.NOM 着く-IPFVP 1SG.NOM 着く-FUTP-NEG=1SG  
 「あいつが行ったならおれは(そこに)行かない。」

結果として、山越 (2004) の定義に沿う *clitic* は、いずれも「語」として機能している *host* にのみ接続するとまとめられる。ただし問題となるのは、すべての *suffix* が語内部に含まれるといえるのかどうかという点、たまたもし含まれるとした場合、何をもって形態的に完結しているといえるのかという点である。これについては第 4 節で再度検討したい。

### 3.4. 選択制限

*clitic* と *suffix* の差異としてあげられる特徴として、*suffix* のほうが選択制限が厳しく、*clitic* は自由に接続できるという点がある。

<sup>4</sup> ただし、漢語から借用されたと考えられる文末 *clitic* の *=le* (<Chi. 了), *=ba* (<Chi. 吧) が接続した場合に限り、述語人称があらわれないことがある。

モンゴル諸語の場合、suffixは形態的な制約が大きい。派生的なsuffixも屈折的なsuffixも、hostが名詞語幹であるか動詞語幹であるかによって接続の可否が判断される<sup>5</sup>。たとえば、派生接辞では次のようになる。

たとえば名詞から動詞語幹を派生するsuffix  $-la_3-$  は (21a)-(21c) のように名詞語幹に接続するが、(21d) のように動詞語幹には接続しない。(21c) のように動詞語幹が名詞化したあとであれば接続が可能となる。

(21) 出名動詞派生接尾辞  $-la_3-$  「～する」

- |             |             |                            |                           |
|-------------|-------------|----------------------------|---------------------------|
| a. ger-le-  | b. doo-la-  | c. id <sup>l</sup> -ee-le- | d. * id <sup>l</sup> -le- |
| 家(N)-[N>V]- | 声(N)-[N>V]- | 食べる(V)-[V>N]-[N>V]-        | 食べる(V)-[N>V]-             |
| 「結婚する」      | 「聞く」        | 「食事する」                     |                           |

動詞から名詞を派生する場合も同様である。行為者名詞を派生する  $-aas^i a(n)_4$  は、(22c) のように名詞語幹には接続しない。名詞語幹には (22d)、次の (23) にあげる  $-s^i a(n)_3$  が接続する。

(22) 出動名詞派生接尾辞  $-aas^i a(n)_4$  「～する人」

- |   |                            |                              |                          |
|---|----------------------------|------------------------------|--------------------------|
| a. bar <sup>i</sup> -aas <sup>i</sup> a | b. man-aas <sup>i</sup> an | c. * mal-aas <sup>i</sup> an | d. mal-s <sup>i</sup> an |
| 建てる(V)-[V>N]                            | 見張る(V)-[V>N]               | 家畜(N)-[V>N]                  | 家畜(N)-[N>N]              |
| 「整体師 <sup>6</sup> 」                     | 「見張り」                      |                              | 「牧畜民」                    |

以下同様に、名詞から名詞を派生する場合 (23)、動詞の態を転換して使役動詞を派生する場合 (24) の例を示す。

(23) 出名名詞派生接尾辞  $-s^i a(n)_3$  「～人」

- |                        |                            |   |  |
|------------------------|----------------------------|---|--|
| a. em-s <sup>i</sup> e | b. tɔgɔɔ-s <sup>i</sup> ɔn | c. z <sup>l</sup> ɔɔɔ-s <sup>i</sup> ɔn | d. * z <sup>l</sup> ɔɔɔ-dɔ-s <sup>i</sup> ɔn |
| 薬(N)-[N>N]             | 鍋(N)-[N>N]                 | 手綱(N)-[N>N]                             | 手綱(N)-[N>V]-[N>N]                            |
| 「医者」                   | 「料理人」                      | 「運転手」                                   |  |

(24) 出動動詞（態の転換） $-ool_2-$  「～させる」

- |                           |                                |                                  |
|---------------------------|--------------------------------|----------------------------------|
| a. id <sup>l</sup> -uule- | b. id <sup>l</sup> -ee-l-uule- | c. * id <sup>l</sup> -ee-g-uule- |
| 食べる(V)-CAUS-              | 食べる(V)-[V>N]-[N>V]-CAUS-       | 食べる(V)-[V>N]-E-CAUS-             |
| 「食べさせる」                   | 「食事させる」                        |                                  |

また、文法的な接辞についても次のように規定される。まず、活用にかかわるsuffixは動詞語幹にしか接続しない。未来分詞  $V-xa_3$  の例を示す。

- |                    |                                 |                             |
|--------------------|---------------------------------|-----------------------------|
| (25) a. gerle-xe.  | b. mana-xa.                     | c. id <sup>l</sup> uule-xe. |
| 結婚する(V)-FUTP       | 見張る(V)-FUTP                     | 食べさせる(V)-FUTP               |
| 「結婚する(こと)。」        | 「見張る(こと)。」                      | 「食べさせる(こと)。」                |
| (25') a. * ger-xe. | b. * manaas <sup>i</sup> an-xa. | c. * id <sup>l</sup> ee-xe. |
| 家(N)-FUTP          | 見張り(N)-FUTP                     | 食事(N)-FUTP                  |

曲用にかかわるsuffixは若干状況が異なる。名詞類（名詞、形容詞、代名詞、数詞）に接続するほか、(27) にあげるような動詞の分詞形（伝統的なモンゴル語学でいう形動詞）にも接続可

<sup>5</sup> 例外的に、漢語からの借用語彙にかんしては名詞語幹に接続するsuffixも動詞語幹に接続するsuffixも接続しうる語幹が存在する (山越 2005)。

<sup>6</sup> 頭骨、脊椎、骨盤等の骨格の歪みを矯正し治療する民間療法を専門とする人物をさす。いわゆる整体とは異なり、シャマニズムなどの宗教的儀礼ともかわりのある治療法であるため、「整体師」という訳はかならずしも適当とはいえない。

能となっている。これは分詞があらたに名詞語幹として用いられることに起因している。ただし動詞語幹には接続しえない。具格語尾-aar<sub>i</sub>の例をあげる。

- |            |  |      |   |      |  |
|------------|--|------|---|------|--|
| (26) a.    | manaas <sup>1</sup> an-aar<br>見張り(N)-INS<br>「見張りで」 | b.   | em-eer<br>薬(N)-INS<br>「薬で」                | c.   | tɔŋgɔŋ-g-ɔɔr<br>鍋(N)-E-INS<br>「鍋で」                           |
| (27) a.    | gerle-x-eer<br>結婚する(V)-FUTP-INS<br>「結婚するために」       | b.   | mana-x-aar<br>見張る(V)-FUTP-INS<br>「見張るために」 | c.   | id <sup>1</sup> uul-x-eer<br>食べさせる(V)-FUTP-INS<br>「食べさせるために」 |
| (27') a. * | gerl-eer<br>結婚する(V)-INS                            | b. * | man-aar<br>見張る(V)-INS                     | c. * | id <sup>1</sup> uul-eer<br>食べる(V)-INS                        |

循環論になるが、以上からシネヘン・ブリヤート語においては suffix, とくに活用, 曲用にかかわるような文法的な suffix が接続しうるか否かが品詞決定の役割を担っているということがいえる。

一方, ほとんどの clitic は suffix ほどの形態的な選択制限はない。また, clitic は suffix のように品詞を決定する役割をもたない。たとえばとりたての clitic は, host がどのような品詞であってもかまわない。

- |       |                  |                         |            |
|-------|------------------|-------------------------|------------|
| (28)  | tende            | neg=le                  | bai-g-aa.  |
|       | そこに              | 一(NUM)=TPC              | ある-E-IPFVP |
|       | 「そこにひとつだけあった。」   |                         |            |
| (28') | oo-g-aad=le      | bai-na=s <sup>1</sup> . |            |
|       | 飲む-E-CVB.PFV=TPC | いる-PRS=2SG              |            |
|       | 「お前は飲んでばかりいる。」   |                         |            |

しかし, clitic にも選択制限があるものもいくつか見られる。述語人称 clitic の場合, 術語となる自立語を host にとるという統語役割による制限がある。しかしこれは suffix にみられる形態的制限とはレベルが異なる。実際に, 述語人称 clitic は名詞述語文でも動詞述語文でもひとしく接続する。

- |      |           |  |
|------|-----------|--|
| (29) | bii       | sorags <sup>1</sup> a=b <sup>1</sup> . |
|      | 1SG:NOM   | 学生(V)=1SG                              |
|      | 「おれは学生だ。」 |  |
| (30) | bii       | onta-na=b <sup>1</sup> .               |
|      | 1SG:NOM   | 寝る-PRS=1SG                             |
|      | 「おれは寝る。」  |  |

条件節を形成する=haa は分詞にしか接続しないようである。

- |           |                          |                         |         |  |
|-----------|--------------------------|-------------------------|---------|--|
| (31(=20)) | tere                     | ɔs <sup>1</sup> -ɔɔ=haa | bii     | ɔs <sup>1</sup> -xɔ-gui=b <sup>1</sup> . |
|           | 3SG:NOM                  | 着く-IPFVP=COND           | 1SG:NOM | 着く-FUTP-NEG=1SG                          |
|           | 「あいつが行ったならおれは(そこに)行かない。」 |                         |         |  |

名詞述語文は従属節を形成することができず, かならずコピュラ的に動詞 bai-が挿入され, その分詞形に=haa が接続する。



- (32) *bii sorags<sup>1</sup>a bai-g-aa=haa jaa-xa=b=bi.*  
 1SG:NOM 学生 いる-E-IPFVP=COND どうする-FUTP=Q=1SG  
 「おれが学生だったらどうするだろう。」

また、同形のとりたての =haa は文の主語に接続する。主語になることのできる名詞類と分詞にのみ接続が可能となっている。

- (33) *ene=haa ixе haixan орон.*  
 ここ=TPC 大きい 美しい 場所  
 「ここはとてもきれいなところだ。」

なお、この条件節形成の =haa ととりたての =haa は、通時的には同一の形式だったと考えられる。同系のモンゴル語では同じ位置に =bol という clitic があらわれる。これは動詞 bol-「なる」の条件副動詞形 (Mon. bol-bol「ならば」) が短縮、付属語化し、本来の条件提示という機能から派生し、とりたての機能も果たすようになったものと考えられている。シネヘン・ブリヤート語の =haa も同様に、条件副動詞 bol-bol<sup>h</sup>または bai-baha「あれば」の付属語化によって形成されたと考えるのが自然だろう。ということであれば、動詞に接続した場合には条件節形成の役割を、名詞類に接続した場合には主題化の役割を担うという機能分化はあるものの、選択制限の幅は狭くないということになる。

もっとも選択制限が厳しいとおもわれるのが、完了アスペクトをしめす2つのclitic, =han3と =leである。双方とも分詞のあと (34), 分詞の否定形 (35)(37) および「ない」を意味する形容詞uguiのあと (36)(38) にしかあらわれない<sup>7</sup>。

- (34) *bii тii-z'e xel-ee=hen=bi.*  
 1SG:NOM そうする-CVB.IPFV 言う-IPFVP=PFV=1SG  
 「(以前に) おれはそう言った。」
- (35) *bii тii-z'e xel-ee-gui=hen=bi.*  
 1SG:NOM そうする-CVB.IPFV 言う-IPFVP-NEG=PFV=1SG  
 「(以前に) おれはそう言わなかった。」
- (36) *tende ugui=hen.*  
 そこに ない=PFV  
 「そこにはなかった。」
- (37) *tere оs<sup>1</sup>-оо-gui=le.*  
 1SG:NOM 着く-IPFVP-NEG=PFV  
 「(行くはずだったのに) あいつは行かなかった。」
- (38) *c'eez=in ugui=le.*  
 ナス=3:POSS ない=PFV  
 「(あると思ったのに) ナスはなかった。」

### 3.5. パラメータの共有の程度

以上見たパラメータを各 clitic がどの程度満たしているかを表にまとめると次のようにあらわせる。

<sup>7</sup> ただし=leについては否定文の例しか収集していない。=hanとは異なり、=leは「自分の予想していたことに反した結果」をしめす場合に用いられるため、実際の言語運用においては否定文であられるほうが自然なためと考えられる。

表3. 各cliticの「cliticらしさ」

	母音調和 しない	語としての 音節構造	hostの完結性	選択制限の ゆるさ
文末=jum	○	○	○	○
文末=daa <sub>4</sub>	△	○	○	○
文末=buddee	○	○	○	○
文末=s'etee	○	○	○	○
Yes-No疑問=go <sub>2</sub>	×	×	○	○
Wh疑問=b	○	×	○	○
問いかけ=ba	○	○	○	○
完了=han <sub>3</sub>	×	○	○	×
完了=le	○	○	○	×
条件節=haa	○	○	○	×
とりたて=haa	○	○	○	×
とりたて=le, =s'e	○	○	○	○
とりたて=s'je	○	×	○	○
述語人称	△	×	○	○
所有人称	△	×	○	○

(各項目も、○がcliticとしての次の一般的特徴を有することを示す：「母音調和しない」…母音調和に影響されない；「語としての音節構造」…(C)V(V)(C)に反していない；「hostの完結性」…hostが形態的に完結している；「選択制限のゆるさ」…hostに対する選択制限がゆるい)

すでに山越 (2004) でも指摘しているように、音声・音韻にかんしてはアクセント以外に積極的に clitic を規定できるパラメータはないと思われる。近隣のモンゴル語について、「母音調和」が「語」の指標となることを指摘する先行記述 (e.g. 一ノ瀬 1988, 水野 1991) もある。しかし、たとえば複合語の多くが母音調和の影響を受けないことなどを考えると、「母音調和」自体が果たして「語内部」の制限であるのかどうか、再考する必要があるだろう。

形態面においては、どの clitic もすべて host が形態的に完結している状態でないと接続できないという共通した特徴を有していることが見てとれる。ただし 3.4 でも述べたとおり、直前の host は確かに文中で自立が可能な形式＝「語」の形式をなしているが、何をもって「語」となりえているのか、つまり何をもって完結した形式といえるのかが問題となる。仮にこの問題が解消できれば、「語を完結させる suffix に後続する付属要素は clitic」と定義できることになる。

#### 4. 「語」を完結させる要素の規定

第3節でみたとおり、clitic が接続する host は形態的に完結しており、文中で自立できる形式となっている。もし suffix のいずれかが「語」を完結させる役割を果たしているとすれば、その suffix を規定することで clitic が定義できるということになる。ここでは、比較的 suffix や clitic が多く接続しやすい変化詞を対象に考えてみたい。

シネヘン・ブリヤート語や近隣のモンゴル語などの変化詞には、大きく分けて名詞類と動詞の2つがある。名詞類とは曲用suffixを接続しうる語類、動詞は活用suffixを接続しうる語類と規定される<sup>8</sup>。こうした曲用や活用にかかわるsuffixは、さまざまな派生suffixが接続したあとに接続する。

- (39) 語根-派生-屈折 (曲用／活用) (派生 suffix は複数個接続可能)

<sup>8</sup> この品詞分類の考え方については山越 (2006) を参照のこと。



- (44) xam-t-r-al-ž-ool-agd-san.  
共(ROOT)-持ちの-[N>V]-[V>N]-[N>V]-CAUS-PSS-PFVP  
「共同体として組織させられた。」

(Kullmann and Tserenpil 1996: 33 を改変)

このような構造をなしていることを考えると、それぞれの suffix が入りうるスロットを規定し、その空き間にゼロを挿入するという分析は非常に煩雑となる。仮に (44) を動詞の基本的な姿とし、(43) で用いられている動詞 asar-aa 「持ってきた」をあらわすと次のようになる。

- (45) asar-ø-ø-ø-ø-aa.  
持ってくる-[-[V>N]]-[-[N>V]]-[-CAUS]-[-PSS]-IPFVP  
「持ってきた。」

これだけでも十分煩雑だが、さらに使役 suffix の重複などもあり、実際には単純にスロットを規定することはできない。こうした「非スロット型」の言語の場合、やみくもにゼロを設定することは好ましくないだろう。必要最低限ゼロを認めるとすると、やはり屈折 suffix に対してのみ設定するのがもっとも適切と考える。

#### 4.2. 屈折suffixが接続したあとに続く付属形式はどう認めるべきか

シネヘン・ブリヤート語では複数の曲用suffixが接続したり、また活用suffixのあとに曲用suffixが接続するような場合と、否定をあらわすsuffixの -guiが活用suffixに続く場合や再帰所有suffixの -aa<sub>4</sub>が曲用suffixのあとに続く場合などいくつか問題点がある。屈折suffixによって語が完結する、つまり語が「閉じる」と規定した場合、こうしたふるまいに対する解釈が可能かどうか検証したい。

##### a. 曲用suffixの二重接続

曲用 suffix には主格および不定対格のゼロ接尾辞のほかに属格、対格、与位格、具格、奪格、共同格などの suffix が認められる。このうち、属格および共同格 suffix が接続した形式に、あらたに他の格 suffix が接続することがある。

- (46) a. temsel-ei-de bai-na=b<sup>1</sup>.                      b. nɔxoi-toi-g-ɔɔr      jab-aa.  
PSN-GEN-DAT いる-PRS=1SG                      犬-COM-E-INS      行く-IPFVP  
「おれはテムセル家にいる。」                      「犬を引き連れて行った。」

ただしこれは非常に用法が限られる。属格 suffix が接続した名詞 N-GEN は「N (をはじめとする) 集団」という名詞として語彙化されることがあるが、そうした場合にのみ他の曲用 suffix と共起する。ちなみにこの N-GEN は、さらに「～の人々」という意味をあらわす派生 suffix も接続できる。

- (47) bur<sup>1</sup>gaad-ain-xan  
生産部隊-GEN-[N>N]  
「生産部隊に所属している人々」

このことから、このような用法で用いられる属格 suffix は、曲用 suffix というよりむしろ生産性の高い派生 suffix として認めるのが妥当といえる。

共同格は動詞の項となり、「N と(ともに)」という意味をあらわす。しかし、動詞の項とならない場合もある。その場合には「N 持ち(の)」という形容詞(名詞類に含む)として機能する。

- (48) a. mɔɾ<sup>i</sup>-toi xun.                      b. ter            xun            ɔlon            xɔn<sup>i</sup>-toi.  
       馬-COM 人                              その 人            多い 羊-COM  
       「馬に乗った人。」                      「その人はたくさん羊を飼っている。」

このことから共同格suffixにさらに曲用suffixが接続する形式N-COM-INFLは、「N持ち(の)」という形容詞に曲用suffixが接続したものと判断できる。つまりこの場合の-tai<sub>3</sub>は、共同格というよりはむしろ付帯をあらわす形容詞を派生するsuffixとみなすのが妥当といえる。このことは、N-COMがその後ろに複数性標示のsuffixを接続できることから支持できる。

- (49) muŋgu-tei-s<sup>i</sup>uud.  
       金-COM-PL  
       「金持ちたち」

以上から、曲用 suffix の二重接続とみられる形式は、いずれも先行する suffix が曲用の機能を担っていないということがわかる。そのため実際には二重ではなく、曲用 suffix が語を完結させるといふ仮説は支持される。

#### b. 活用suffix-曲用suffixの二重接続

続いて活用と曲用の suffix が二重に接続する場合である。3.4(27) でも示したように、動詞の分詞形は、文中で形容詞的に他の名詞を修飾 (50a) したり、名詞的に他の動詞の項となる (50b) ことができる。

- (50) a. ons'a-xa            bis<sup>i</sup>ig.            b. oo-x-aa            bɔl<sup>i</sup>-ii.  
       読む-FUTP    本                      飲む-FUTP-REFL    やめる-2.IMP  
       「教科書」                                      「飲むのをやめろ。」

(50b) からわかるとおり、モンゴル諸語には日本語の「形式名詞」にあたる要素がなく、分詞や形容詞はそのまま曲用 suffix を接続することができる。しかしその場合、分詞として完結した形式にあらたに suffix が接続する構造となってしまう、仮説に反する。

属格および共同格と同じく、仮に (50b) のように名詞的に用いられる場合の分詞 suffix を派生 suffix と位置づけられる可能性があるが、分詞は曲用 suffix 以外には次項であげる否定 -gui を接続できる程度で、積極的に派生 suffix と認めるには問題が残る。

#### c. 否定 -guiの接続

否定をあらわす suffix の -gui は名詞および分詞、動詞の終止形に後続しうる。

- (51) a. muŋgu-gui.            b. oj-aa-gui            nɔxɔi.            c. jab-na-gui=b<sup>i</sup>.  
       金-NEG                      繋ぐ-IPFVP-NEG    犬                      行く-PRS-NEG=1SG  
       「金のない。」                      「繋がれていない犬。」                      「おれは行かない。」

否定 -guiは名詞類 (51a)、名詞的に機能する分詞 (51b) のみならず、動詞の終止形 (51c) にも接続できる<sup>11</sup>。音韻的にはsuffixと認められるが、選択制限のゆるさはclitic的である。ただし、名詞や分詞に接続した場合には、それがあらたに形容詞として機能し、曲用suffixを接続することが可能となる。

<sup>11</sup> (51c)のように終止形に接続する用法は近隣のモンゴル語には確認されない。また終止形-guiは、分詞-guiのように形容詞的に機能することはできない。

- (52) a. *mun̄gu-gui-g-eer.*      b. *oj-aa-gui-da.*  
 金-NEG-E-INS                      繋ぐ-IPFVP-NEG-DAT  
 「金のないままに。」              「繋がれていないやつに。」

仮に-guiをcliticと認めるとすると,(52a)(52b)はともにcliticに曲用suffixが接続するということになる。日本語の「屈折詞の後倚辞」(宮岡2002:81)とされる助動詞が屈折することから,cliticにsuffixが接続することについてはさほど問題がないのかもしれない。しかし日本語の助動詞と大きく異なるのは,ほかにこうして曲用するcliticが現時点では見当たらない点である。

また日本語の助動詞に続くsuffixは,おそらく助動詞をそのhostにとっている,つまり助動詞の屈折的要素と考えられる。一方(52a)(52b)の-guiに後続するsuffixは,-guiではなく*mun̄gu-gui*や*oj-aa-gui*をhostとしており,-guiの屈折的要素とは考えにくい。cliticと認めることを完全には否定できないが,少なくとも日本語助動詞のような「屈折詞の後倚辞」として=guiを認めることには無理がある。

派生が可能であること,cliticとみなすには問題があることから,-guiはsuffixと認めるべきだろう。だとすると活用suffixのあとに例外的に否定のsuffixが入りうることを規定したほうがよいのかもしれない。

#### d. 再帰所有-aa<sub>4</sub>の接続

主語以外の項として機能する名詞類もしくは分詞の指示対象が主語の所有物または主語の動作である場合に,曲用suffixのあとに再帰所有をあらわす-aa<sub>4</sub>が接続する。

- (53) a. *ger-t-ee*      *ɔs<sup>i</sup>-ɔɔ=b<sup>i</sup>.*      b. *jab-x-aa*      *bɔl<sup>i</sup>-ɔɔ.*  
 家-DAT-REFL      着く-IPFVP=1SG      行く-FUTP-REFL      やめる-IPFVP  
 「おれは自宅に帰った。」              「(あいつは自分が)行くのをやめた。」

この-aa<sub>4</sub>とhostとの間にcliticが挿入されることはなく,また-aa<sub>4</sub>にさらにsuffixが後続することはない。つまり名詞類においてはもっとも後ろに接続するsuffixということになる。

これに対しゼロを認めるかどうかも問題があるが,少なくとも再帰所有suffixが接続していればそれ以上suffixが接続する可能性はなく,また曲用suffixが接続していればその後ろには再帰所有suffix以外に接続の可能性はない,と規定することができるだろう。

## 5. まとめ

以上,第4章で形態的完結性の規定が可能かどうか検討した。基本的には屈折suffixが語を完結させる重要かつ必須の要素となっているといえるだろう。しかし否定-guiの接続によるあらたな派生,常に屈折suffixに後続する再帰所有-aa<sub>4</sub>,分詞の名詞的用法における曲用suffixの接続などのふるまいを見ると,[host(-派生)-屈折]をもって「語」が完結するとし,それに後続する形式をcliticと単純にみなすには例外が多いと言わざるをえない。

仮に否定-guiなどの形式をcliticと認めた場合,4.2cにあげたような形態論上の問題が生じる上に,形式面での特徴づけが不可能となってしまう。否定-guiや再帰所有-aa<sub>4</sub>などは派生suffixと異なり,出現位置を比較的明確に示すことができる。そこでこれらをsuffixと認め,屈折suffixと同じく語を完結させる要素であるとする,主格名詞や動詞命令形に-ɔを設定したように,-guiや-aa<sub>4</sub>の出現位置にも-ɔを認める必要がでてくる。これも(45)のようにむやみに-ɔを増やすことになり,話者意識から乖離した形式となってしまう。

形式面,つまり音韻面での定義に従った場合には,その定義を満たすcliticがすべて機能面でも「語」の外に接続するという条件も満たす。しかし形態的にその「完結性」をもってcliticを

<sup>12</sup> 目的語の場合,指示対象が人以外であれば不定対格(-ɔ)に接続する。指示対象の場合には対格suffixと融合したと見られる-jaa<sub>4</sub>が接続する。

定義すると、音韻面で定義を満たさない形式が生じてくる。こうしたギャップを考えると、すくなくともシネヘン・ブリヤート語においては clitic を形式的、つまり音韻的に定義するのが妥当だろう。もちろんそこには多くの言語で共有している機能的特徴が影響しており、それが反映された結果、形式的特徴としてあらわれると推測される。形式的な定義が通言語的に適用されるかどうかは不明である。機能的定義のほうが clitic の特徴をより顕在化できるかもしれない。しかし各言語で形式化される際の特徴づけによって、個別言語の観察からは機能的定義がしにくい結果を生み出しているのではないだろうか。

### 略記号

1,2,3: 人称, ABL: 奪格, ACC: 対格, CAUS: 使役, COM: 共同格, COND: 条件, CVB: 副動詞, DAT: 与位格, E: 挿入音, FUT: 未来, HON: 敬称, IMP: 命令, INFL: 屈折, INDF: 不定対格, INS: 具格, IPFV: 不完了, MOD: モダリティ, N: 名詞, NEG: 否定, NOM: 主格, NUM: 数詞, ...P: 分詞, PFV: 完了, PL: 複数, POSS: 所有, PRS: 現在, PSS: 受身, Q: 疑問, REFL: 再帰所有, SG: 単数, TPC: とりたて, V: 動詞

### 本稿のデータ

本稿のデータは 2000 年から 2006 年にかけて継続している現地調査によって得られたものをもとにしている。調査にあたっては以下の助成をうけた：平成 12-13 年度文部科学省科学研究費特定領域研究(A)「中国東北部およびロシア極東のツングース諸語に関する緊急調査」(代表：津曲敏郎)，平成 14-15 年度科研費補助金特別研究員奨励費「モンゴル諸語における語形成および言語接触に関する研究」，トヨタ財団 2004 年度研究助成 B「中国・ロシア・モンゴルに散らばったブリヤート人たちのライフヒストリー調査による少数民族の社会的、文化人類学的、言語的、歴史的状況の再構成」(代表：ジミンゴア)，平成 17-18 年度科研費補助金特別研究員奨励費「中国東北部の消滅に瀕したモンゴル諸語の記述および言語接触にかんする研究」。

### 参 考 文 献

- 服部四郎. 1950. 「附属語と附属形式」. 『言語研究』 15. pp.1-26.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 一ノ瀬恵. 1988. 「モンゴル語の人称代名詞と人称関係小辞」. 『日本モンゴル学会紀要』 19. pp.15-20.
- 風間伸次郎. 1992. 「接尾型言語の動詞複合体について：日本語を中心として」 宮岡伯人編『北の言語：類型と歴史』. 東京：三省堂. pp.241-260.
- Kullmann Rita and D. Tserenpil. 1996. *Mongolian Grammar*. HongKong: Jensco Ltd.
- 宮岡伯人. 2002. 『「語」とはなにか：エスキモー語から日本語をみる』. 東京：三省堂.
- 水野正規. 1991. 「モンゴル語の所属小辞」. 『日本モンゴル学会紀要』 22. pp. 42-56.
- 山越康裕. 2004. 「モンゴル諸語の 'particle' について：シネヘン・ブリヤート語の事例から」. 津曲敏郎編『環北太平洋の言語』 11. pp.151-178.
- . 2005. 「シネヘン・ブリヤート語の借用にみられる諸特徴について」. 津曲敏郎編『環北太平洋の言語』 12. pp.185-205.
- . 2006. 「シネヘン・ブリヤート語」. 中山俊秀, 江畑冬生編『文法を描く：フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』 1. pp.271-298.